

第 46 回日本臨床心理学会東京大会報告

第 46 回日本臨床心理学会大会委員長

高橋 晶子（錦糸町カウンセリングルーム）

今年の大会は 2010 年 9 月 25 日（土）26 日（日）、東京代々木の国立オリンピック記念青少年総合センターにて行われ、2 日間に 126 名の皆様にご参加頂きました。また事前登録も含めますと、計 157 名の方が大会に参加する意志を表明されました。そのうち学会員の参加は 52 名で、会員数 277 名の内、約 1/5 の参加がありました。また個別発表 9 件、自主企画 1 件の申込みがあり（当日、個別発表 8 件報告）、今年は例年に比べると会員の参加や発表が多い大会となりました。それから非会員参加者は、以前学会員だった方や常連の非会員の方をはじめ、会員のお知り合いの方や、インターネット・ポスター・各種案内などを通じて今回の大会をお知りになった方が、沢山参加されました。また、今年は学生さんの参加も例年より多くありました。

このように今年の大会は、日本臨床心理学会が会員内外を問わず、様々な方たちに関心を持たれ、支えられているということを実感するような大会になったと思います。今回、大会に関心を寄せて下さった全ての皆様、そして大会運営に陰日向になってご協力下さった全ての皆様に、改めて感謝申し上げます。ありがとうございました。

次に今年の大会がどのような大会だったのかということ、大会委員長として企画した全体会/パネルディスカッション「臨床心理学の理論と実践—臨床における関係性と、様々なスタンスを超えて—」の振り返りを踏まえながら、以下、私の感想として皆様にお伝えしたいと思います。

今回の全体会は「臨床家のスタンスはどのような経緯で確立されていくのか。それぞれの経緯から確立されたスタンスを、クライアントとの『関係性』という視点から見た場合、どのようなスタンスの違いが見られるのか？そしてその『違い』をどのように認識すれば、お互いに牽制し合うのではなく、同じ『臨床家』としてクライアントのために歩んでいけるのか」ということを見出すことを目的に、企画しました。当日は 3 人のパネリストの方それぞれが、ご本人の「人となり」そして「ご自身のご経験」を、極めて率直に全力を尽くして語って下さいました。それは正に、「その人に歴史あり」と言うに相応しい、重厚な内容でした。また、3 人の方の御発題を受けて指定討論者の島蘭さんから、「我が国における臨床心理学の歴史」と「臨床心理学に限らない精神世界における諸活動が、如何に多様性を含んでいるのか」という、示唆に富んだお話を頂きました。そして 4 人の方の御発題を通して、過去の歴史があるからこそ「今」の多様なスタンスがあるという大きなテーマを、改めて認識することが出来ました。更にディスカッションでは過去の歴史、特に「我が国における臨床心理学」という視点から「今の臨床の世界」を捉える事が、臨床家それぞれのスタンスの違いを超え、その本質を捉えるきっかけになるのではないのか？という視点を、私は得ることが出来ました（詳しくは来年発行予定の臨床心理学研究第 48 巻第 3 号をご覧ください）。

「今」の時代に存在する私たちが、「我が国における臨床心理学の歴史」という認識をベースに踏まえながら、それぞれの個人史を振り返る。それを通して、「自分は何故、どういう経緯の中、『今』のスタンスでクライアントの前に存在しているのか」という自らの立ち位置・自分の軸を再確認する。そして「最初の出発点は同じだった」が、「それぞれがそれぞれの歴史を作った『今』がある」という視点で振り返った時、お互いの違いと共通点をそれぞれ認め合いながら、臨床の世界の未来を作っていくことが出来るのではないか？ということ、今回私は、この会を通して改めて認識することが出来ました。

そういう意味で今回の大会を「我が国における臨床心理学の歴史」という視点で振り返った時、今回のプログラムは正に、これまでの日臨心がその歴史の中で大切にしてきた多くのエッセンスを集めた、ある意味集大成に近い内容になったように思います。例えば「会員による個別発表や自主企画」という「会員の自主的な活動の場」である日臨心、「医療観察法」をテーマに、「法律」という社会からの突きつけに対する矛盾を追及する視点を持つ日臨心、「心の癒し」を「専門家」と呼ばれる人と呼ばれない人との違いという観点から比較検討を行う日臨心、精神科医療で詳しく触れることをタブーとされてきた「幻聴」への「される側の視点に立った新たな認識」を提示する日臨心、「地域臨床」という地道な活動の振り返りと、そこから見出された「差別的課題と心理的支援の視点」を大切にする日臨心など。

以上の様に今回のプログラムはどれもが、これまで日臨心がずっと大切に培ってきたテーマを際立たせるような内容のプログラム構成だったということ、大会が終わって改めて私は実感いたしました。それと同時に今回見出されたこれらのテーマを大切にしつつ、未来の日臨心学会活動をより活性化させていければと思いました。

私たちが「今」は、過去の歴史があったからこそこの「今」です。それは臨床家それぞれのスタンスもそうですし、学会のあり方もそうです。日臨心が創設されてもうすぐ50年。過去を振り返りつつ、より良い臨床の世界を目指すべく、今回の大会をこれからの日臨心の活動の原点にしながら、新たな活動を皆で一緒に作って行きましょう。

第46回大会定期総会報告

日本臨床心理学会事務局

1. はじめに

大会委員長挨拶：高橋晶子 全体司会：氏家靖浩

2. 議長、書記選出

運営委員会推薦で、議長：百田功、書記：橋本悦夫が決定した。

3. 第19期運営委員会中間活動報告（案）

臨床心理学研究（以下臨心研）第48巻第2号 28頁～30頁掲載の「第19期運営委員会中間活動報告（案）」が、運営委員長藤本 豊（代読：佐藤和喜雄）より報告された。

それに対し、研修報告について「もう少し詳しく報告を。」と発言があり、「第18期運営委員会が行ったことは既に報告されている。今期はまだ研修を実施していないので、これから行われる研修について、予定として載せてある。運営委員の改選が昨年11月で、それ以降の報告となってい

るため、報告と今大会以降の予定が混ざっている。中間報告なので今後の研修については、次年度第49巻2号の運営委員会活動報告案に報告される。」と返答がなされた。その後、拍手で承認。

4. 2009年度会計報告案・2010年度予算案

臨心研第48巻第2号31頁～35頁掲載の「2009年度決算案、2010年度予算案」が、事務局長高橋晶子より報告され、2009年度決算案については、会計監査の小谷野博と渡辺由美子より監査報告がなされた。

それに対し、「会費の値上げの予定は？」との質問があり、「今のところ必要がない。」と返答がなされた。「編集委員会報告はどこでされるのか？」の質問には、「運営委員会中間報告案の中で報告されている。」と返答がなされた。「編集委員会報告の別建て希望。」に対しては、「どのようにするか運営委員会で検討する。」と返答がなされた。その後、拍手で承認。

2010年度予算案については、「毎年30名ほどの退会者があり収入減である。」と報告がなされた。

それに対し、「賛同者を増やしていくような学会にしていきたい。会員の減少を運営委員会だけでなく、会員全員でくい止めていきたい。」と発言がなされた。また、「今年度、学会編の本の印税を雑収入に入れたこと。」に対して、「印税は学会の業績として『印税収入』として明示した方がよい。」と発言があり、「雑収入から出し、印税と項目を立てて計上するかどうかは、次年度予算案の際に検討する。」と返答がなされた。その後、拍手で承認。

5. その他

「個人への依頼論文の掲載に関する掲載の是非について・地方委員会がNPO法人との共催で研修会等を開催する場合の妥当性について、継続検討してほしい。」との発言がなされた。それに対し、掲載論文に関しては「当時、編集委員会として掲載するという判断をした。論文掲載基準については、投稿規定の改訂を行い対応して来た。」と返答がなされた。

また、「今後の総会運営」について「こういう事は総会でキチンと議論するべきだ」という発言や「現在の学会の状況で、このような形で議論していてよいのか。もっと建設的な議論を。」という発言がなされた。それに対し「運営委員会としては、次回の運営委員会で今後の学会のあり方について幅広く検討する予定なので、その中で本日出された内容についても検討する。会員の参加は可能。日時・場所はCP紙でお知らせする。」と返答がなされた。

その他お知らせとして、11月16日精神保健従事者団体懇談会が共催する講演会の案内がなされた。

以上

※なお、総会に参加されなかった会員で、「第19期運営委員会活動中間報告（案）、2009年度会計報告案・2010年度予算案」に異議がある方は、2010年12月31日までに、文書で異議内容を学会事務局に提出してください。

技法以前としての「臨床」、または豊かな多様性へ向けて

—第46回日本臨床心理学会大会参加に寄せて—

兵頭 晶子（静岡大学）

私の専門は歴史学だ。より具体的に言えば、精神病と呼ばれる病気をめぐる「治療文化」の歴史について調べることが、私の研究テーマである。だから、本学会への大会参加は初めてだったにも関わらず、そこで語られ議論されている内容には、深い親近感を覚えた。様々な角度から真摯に、かつ誠実に、こうしたテーマに取り組んでおられる方々と出会えたことは、歴史学はみ出し系（笑）の私としては嬉しい限りだ。そこで、このような一風変わった立場から、今大会に参加した感想をつれづれに述べてみたいと思う。

私が心惹かれる臨床家の言葉には、ひとつの共通点がある。それは、臨床の現場において大切なのは「何をしたか」ではなく、むしろ「何をしなかったか」ということだ。今大会の全体パネルディスカッションでも、パネリストの宮脇稔氏が次のように述べていた。現場で必要だと感じた変化のためには「理論も都合よく利用させてもらいました」、と。そして結局、「心理学の治療理論や技法はそれほど重要なものではなかったのです」と（『臨床心理学研究』48巻2号、2010年8月、P.23）。

それは、宮脇氏の話の中にさりげなく登場した、従来の精神科病院における旧弊をことごとく廃止していった「開かれた精神医療」の立役者・石川信義氏の姿勢にも相通じている。石川氏はそうした決断を、「医療的な効果云々のためではなく、人間として当たり前のことだからやったというのにすぎない」と語っている。

ある特定の技法や理論は、治療において「何をすべきか」を示すひとつの指針、あるいは目指すべきひとつの理念だろう。それらを一切用いることなしに、おそらく治療は成り立たない。しかし、実際の臨床という現場では、治療という枠には収まりきれない様々なことが起こり得る。たとえば、精神科病院において「鍵」が象徴する問題、またそこから派生する様々な困難などは、どれだけ技法や理論を並べても決して解決しないだろう。実験室のように無菌的な中立空間としての「臨床」は、現実にはあり得ないのだ。「何をしなかったか」が逆に大切になる局面とは、そこにこそあるのだろう。

こうした点をふまえて、私の知人である精神科医の杉林稔氏は、認知行動療法や森田療法などの専門化された「大文字の精神療法」に代表される「治療」と「臨床」とは、区別して考えるべきではないかと提唱している。杉林氏は、「臨床」を次のような言葉でとらえていく。

「『臨床』には種々雑多なものが混淆する。指標となるようなものはほとんどない。臨床家の人間性までもろに出てしまったり取り繕いようもない。…『必要』でも『不必要』でもなく、『可能』でも『不可能』でもない。患者と出会う前から『臨床』は始まり、『治療』が終了しても『臨床』は続く。」

（杉林稔「日常臨床を見つめるもの」『臨床精神医学』36巻11号、2007年）

このような「臨床」の本質をもっとも上手く言い表したのが、北海道浦河「べてるの家」での実践から生まれた向谷地生良氏の「技法以前」という言葉だろう。今大会で交わされた様々な議論を聴くことで、私はあらためて「技法以前」の大切さを学んだ気がした。そして、本学会がなぜ「心理」よりも先に「臨床」を掲げるのか、「心理」より「臨床」を重視するのかという理由も、何となく分かった気がした。

「臨床」とはおそらく、それぞれの専門的立場や技法の相違を越えて誰もが共有しうる、「技法以前」の何かを指しているのではないだろうか。そうした地平に立つことで、今大会で交わされた諸々の議論は、より実りある「聴き合い」や「対話」へと成熟していけるのではなかろうか。

あのと看、あの場に居合わせた多くの人が、それぞれ固有な立場にあり、ある特定のものの見方をもつて、そこにいた。それは専門的な理論や知識の次元にとどまらず、これから専門の道を歩もうとする学生さんや、当事者・家族の方々も含めて、そのように言えると思う。各々が辿ってきた人生やそこでの経験、言うなれば学会という場所とは一見縁遠いような日常生活における営みまでもが、それぞれの立場や見方に深く影響してくる。

まして、ある特定の技法を日々実践しており、その技法の有効性や正当性を背負って発言しようとする臨床家ならなおのこと、そうならざるを得ないだろう。

しかし、自身の固有な立場や特定のものの見方ばかりを優先すると、相手が何を本当に問題提起し、伝えようとしていたのか、の半分も聴けなくなってしまう。結局は自己主張の押し付け合いに陥り、真の意味での「聴き合い」や「対話」は成り立たなくなってしまうのだ。私が見聞きした限りでも、そのように感じられる局面がいくつかあった。

かく言う私自身、近代西洋医学とは対照的なアプローチをとる民間療法などの「治療文化」について多くを知り、また機会があれば語ろうとする立場と見方をもつて、そこにいた。そのため、「幻聴」に関する脳科学的アプローチを拝聴した際、登場するいくつかの事例を興味深いと感じる一方で、その結論に対するやるせなさのようなものが、どうしようもなく募ってしまった。しかし、パネラーの佐藤和喜雄氏は、そんな私にこう語りかけてくれた。「色々な立場や見方があっていい。One of themだと思います」と。

今なら私もそう思う。技法以前としての「臨床」は、色々な立場や見方があっていい。立場や見方が多様であればあるほど、「臨床」の土壌はますます豊かになるだろう。それぞれの技法や理論を突き詰めていく過程で、互いのあいだに何らかの抜き差しならない矛盾が生まれることになったとしても、その矛盾さえ、やがては豊かさの肥やしとなるに違いない。

むしろ、そうした矛盾をも受け容れられる「あいだ」こそが、「臨床」の地平には、何よりも不可欠なのではないだろうか。そして、たくさんの「あいだ」を保った豊かな多様性こそが、今の世の中に必要な、新しい「治療文化」を醸成させていく決め手となるのではなかろうか。こんもりと繁る森の中で、多くのいのちが織りなす栄養豊かな腐葉土が、広く深くしっかりと根を張った、見事な大木をゆっくりと育て上げていくように。

たとえば、私たちが近著『治療の場所と精神医療史』（日本評論社、2010年）で紹介した日本各地の寺院や神社、温泉は、それぞれの宗派・趣旨や辿った歴史、地域社会との関わりがあり、そこで参籠する病者や家族たちがどう過ごしていたのかも、一言で括りきれほど単純なものではない。しかし、そうした多様性の中には、共通するひとつの大きな「治療文化」があった。まさに、先ほどのOne of themという表現がしっくりくる。Oneは何かを排除し単一に絞られていくものではなく、多様性を包摂し結び合わせていく何かだと私は思う。

それぞれの「治療の場所」における営みは、杉林氏の言葉を借りれば、「「治療」と「臨床」とがほどよく溶け合っている様子」であった。こうした、かつての「治療文化」を紡いだ糸に連なるような、次代に繋いでいけるような新しい「治療文化」が、「臨床」という豊かな多様性の中で育まれていくことを、心より願っている。

★『幻聴の世界』が日本経済新聞で紹介されました！

幻聴の世界 日本臨床心理学会編 < 平成22年10月31日(日曜日) 21面 読書 >

「幻聴」とは聞こえるはずのない声や音が聞こえる現象。統合失調症など精神疾患の代表的な症状とされるが、本書は医学書ではなく、一般向けに書かれた不思議な世界の案内書だ。この世界はわからないことがまだ多く、読後にはこれが病気なのかどうかも判然としなくなるだろう。イルカから地球滅亡の警告を受けた人、聖徳太子の声につかれて教祖となった人など事例も興味深い。様々な治療法なども紹介されている。(中央法規出版・1400円)

臨床心理学会感想

河合英紀（大阪府立大学大学院・授産施設きょうばし）

私は今回初めて、第46回日本臨床心理学会大会（東京大会）（以下、臨床心理学会）に参加させていただきました。1番の衝撃というか、印象に残った経験は、情報交換会でした。今まで、論文や書籍、講演などで存じあげていた著名な先生方が気さくに話かけて下さるのです。どこの誰ともわからない私に。それだけで「なんやこの学会は！めっちゃ距離感が近い！」という戸惑いとうれしさを感じていると、なんと学会初参加の人は前で挨拶をしなければならないということになりました。頭の中はパニック状態で「とてもアットホームな学会でびっくりしています」と、はずかしい挨拶をしてしまいました。また、ミニライブをしたり、その音楽にのってダンスをしたりと、今まで私が経験した学会にはない何でも受け入れてくれる温かい雰囲気を感じることができた情報交換会でした。

今回、臨床心理学会に参加した一番の目的である「自主企画 デイケアのちょっといい話」では、臨床経験の豊富な先生方が多く集まり、大変勉強になりました。この企画は浅香山病院A館デイケアの百田功先生と山崎勢津子先生が中心となり「現場で働くデイケアスタッフならではの実感や悩みを共有し、学会などではメインテーマになりにくい、ささやかだけれど大切なこと」を考えました。臨床心理学会以外の学会でも地道に伝えていただいているもので、そのファンとなり毎回参加させていただいています。

越智浩二郎先生から「エビデンスは数値だけではなく、言葉（記述）でも出すことができる」という言葉をいただき、この企画は今後のデイケアにとって必要だということを後押しして下さったような気持ちになりました。私自身は参加することでしかお手伝いできないですが、これからも追いかけていきたいと思っています。

その他にも「ヒアリング・ヴォイスズ」のパネルディスカッション等、とても興味深く、勉強になった学会でした。ありがとうございました。

お知らせ

日本心理学諸学会連合主催 公開シンポジウム

心理学と現代社会

- ★2010年11月27日（土）午後1：30～4：30 東京会場：東京大学（本郷）経済学部棟第1教室
★2010年11月28日（日）午後1：30～4：30 大阪会場：梅田アクツスリーホール

参加費 社会人 500円
学 生 無料（学生証をお持ちください。）

事前申込方法 ・お名前（フリガナ） ・ご所属 ・連絡先（メールアドレス等） ・会場
以上を明記の上、受付メールまたはファックスでお申込みください。
受付メール：nissinren-sympo@jupa.jp
FAX：03-6658-4585

当日参加可能ですが、各会場定員（200名）を超えた場合、お断りすることもあります。

※ 詳しくは日本心理学諸学会連合のホームページを御覧下さい。 <http://jupa.jp/>

★ 大会に参加された 伊藤 久子さんから

次の「詩」が事務局に送られてきましたので、掲載させていただきます。

東京大会に参加させて頂いて

伊藤 久子

おやすみなさいと天上の節々に言ってみる
怖く見えた闇の猛獣は僕にこう言うんだよ
大きな眼の奴が「坊主、今日も一日頑張ったよな」と言う
「俺は知ってるぜ。お前、泣きながらでも頑張ったよな」
奥でじっと黙っていた奴も僕に言うんだ
幾つかの震えるような声の主を確認して

最後に
僕の眠気眼の綴じる時に「おやすみ」と言ってくれるの

おやすみなさい、僕、頑張ったよ

白木色に変わる天上の節々は朝になると僕に今度はこう言うの
「お目覚めは如何？今日は私が付いているわ、大丈夫よ」って

私も小さな頃天井の節々が怖かったこと、
なのに、カビ臭い押し入れが冒険的だったことを思い出しました。
発想の転換が出来るといいのでしょうか？
容易なことではないとは思うのですが。
辛いですね

ポケットに幾つもの命綱を詰め込んでいる
声の繋がりと、過去の書き残しと、

沢山の人に出会って、色々の話をしても
残っているのがこれらの文字だけなんて

あの頃には戻れないものなのかしら？
好きな服を着て好きな時を歩けない？

生きることの辛さは
老い先短い私に何を提示するつもりなのか
こうすればどうにかなるのに
ああすればいいのに
何て事を考えても何一つ叶えられずに

僕が思うこと
僕は
もっと、軽く生きたいよね
そんなに難しく考えないでよ
体の動く時に動くようにすればいいじゃない
何で無理をしなくちゃいけないの？
充分頑張った人は休んでいいんだよ
止まってるんだ、もう、いいんだ

事務局からのお知らせ

日本臨床心理学会事務局

1. 次回、運営委員会のお知らせ

- ・日程：2011年1月8日（土）、9日（日）
- ・場所：国立オリンピック記念青少年総合センター1階会議室（部屋番号未定）

※運営委員会は会員の方ならどなたでも参加できます。参加御希望の方は2011年1月5日（水）までに、学会事務局までメール、電話、ファクスにてお知らせください。追って当日の会場、詳しい時程、内容についてお知らせいたします。なお、会場の都合上、会員の参加は4名までとなります。参加申込みは先着順とさせていただきますので、ご了承ください。

2. 会費納入のお知らせ

学会費を収めていない会員の方には、会費振込用紙を同封しました。用紙に記載されている年度の学会費をお振込み下さい。また、会費納入状況は、タックシールや封筒の下側に「最終納入年度の下2桁の数字」が印字されておりますので（「09」の方は2009年度まで納入されているということです）、それを参考に2010年度分学会費と未納分学会費を合わせてお振り込み下さい。行き違いの際はご容赦ください。銀行振り込みを御希望の方は、以下の口座にお振り込み下さい。

郵便局：00190-8-59797

みずほ銀行：稲荷町支店 普通 1784345 ニホンリンショウシンリガツカイ

学会は皆様からの会費で運営されています。年度内に会費を納入いただかないと、予算的にも年度末の支払いが厳しい状況となりますので、極力早めの納入をお願いいたします。

なお、2008年度までしか会費を納めていらっしゃらない方は2年間の滞納となりますので、2010年度末（2011年3月末）で自然退会扱いとなります。退会をお考えの方は2010年度までの未納分をお支払いいただいた上、退会されるご意志を事務局までご連絡下さいますよう、お願いいたします。

3. 学会事務局の事務局代行業者への委託について

これまで学会事務局は、週1日5時間の事務局員勤務と、事務局長の月数回の来局で運営が行われておりました。しかし事務局業務が細かく専門化し、また事務局員が毎年交代となっている昨今、今の事務局体制では十分な事務局運営が行えない状況となっております。

そこで現在、事務局業務の一部事務局代行業者への委託を検討しております。詳しくは1月に行われる運営委員会で検討・決定し、3月末までには皆様に結果を御報告したいと考えております。

学会事務局運営に関しまして、何か御意見などございましたら、是非、学会事務局までお知らせ下さい。どうぞよろしくお願い申し上げます。